

# 高城B遺跡第2次発掘調査報告書

2001年3月

吹田市教育委員会

## 序

吹田市におきましては、これまで公共事業および民間の開発等に伴い、数多くの発掘調査を実施してきました。

本書で報告する高城B遺跡につきましては、平成6年に個人住宅の建築に伴う発掘調査によって発見された遺跡です。当初は、高城遺跡B地点として周知されていましたが、その後、遺跡周辺での都市計画道路敷設工事に伴い、発掘調査を行ったところ、遺跡の範囲が面的に広がることが判明し、遺跡名も高城B遺跡に変更されたという経緯をもっております。

高城B遺跡が広がる一帯は、吹田市内でも早くから住宅地として開発されてきた地域です。こうした地域にありますことは、近年、住宅の建て替え等に伴う発掘調査が増えてきており、市民の方々が、遺跡の保護という問題に直面される場面も多くなってきております。

本市教育委員会におきましては、こうした建築・開発行為と文化財保護の間の調整を踏るべき日々努めておりますが、これを円滑に進めていくためには、やはり市民の方々のご理解を得ずにしては困難なものといえます。

市民の皆様におかれましては、発掘調査をはじめとする本市の文化財保護行政に対し、今後とも深きご理解とご協力を頂けますようよろしくお願い申し上げます。

平成13年3月

吹田市教育委員会

教育長 今 記 和 貴

## 例　　言

1. 本書は、平成11年度に実施した、吹田市朝日町1316-8他における高城B遺跡第2次発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係賀納章雄が担当した。整理作業については、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。
3. 本文の執筆は、Ⅲ(3) 遺物を同係堀口健二が行い、他を賀納が分担した。
4. 遺物実測は、堀口が行い、木製品の一部を花崎晶子が行った。縮尺は、土器を1/4、木製品を1/6とした。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P (東京湾標準潮位) を示す。
6. 発掘調査においては、建築事業者である東急不動産(株)、東急建設(株)をはじめ、多くの方々の協力を得た。記して感謝致します。
7. 発掘調査には以下の方々の参加を得た。  
大城道則、阿部公子、福島直子、佐藤健太郎、森大樹、楠本花

## 目 次

I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の成果	
(1) 基本土層序	2
(2) 遺構	4
(3) 遺物	7
IV まとめ	12

## 挿 図 目 次

第1図 高城B遺跡第2次発掘調査地周辺図	1
第2図 調査区平面図	2
第3図 土層断面図	3
第4図 遺構平面図	5
第5図 土坑実測図	6
第6図 落ち込み土層図(断ち割り部分)	6
第7図 遺物実測図1	8
第8図 遺物実測図2	9
第9図 昭和町遺跡・昭和町遺跡B地点出土須恵器実測図	11

## 図 版 目 次

図版1 調査風景・遺構検出状況	1
図版2 落ち込み・土坑付近	2
図版3 落ち込み近景・断ち割り	3
図版4 溝3・溝2付近	1
図版5 溝1・溝2付近・遺構検出状況	2
図版6 土坑・土坑内板材近景1	1
図版7 土坑・土坑内板材近景2	2
図版8 土坑・土坑内板材近景3	3
図版9 遺物1	1
図版10 遺物2	2

## 報告書抄録

ふりがな	たかしろびーいせきだい2じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	高城B遺跡第2次発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	賀納章雄 堀口健二
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)6384-1231
発行年月日	西暦 2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 °'."	東 経 °'."	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかしろびー 高城B遺跡	すいた し あさひ まち 吹田市朝日町 1316-8他	27205	117	34° 45' 48"	135° 31' 48"	20000218~ 20000304	180	共同住宅 の建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高城B遺跡	集落遺跡	古墳時代	ピット、土坑(井戸) 落ち込み	土師器、須恵器 板材	なし

## I. 調査に至る経過

今回の発掘調査は、共同住宅の建築工事に伴うものである。当初、調査地は高城B遺跡の周辺地として、平成12年1月20日・25日に9か所の調査トレンチ（T1～T9）を設けて試掘調査を行った。その結果、古墳時代の遺構・遺物が検出されたことから、当地が遺跡の包蔵地であることが新たに判明し、予定の建築工事によって遺跡の破壊が考えられる部分について拡大調査を実施したものである。

拡大調査については、約180m<sup>2</sup>の調査区を設け、平成12年2月18日から3月4日にかけて実施した。また、調査終了後の平成12年3月29日から4月6日にかけては、建築の地下掘削工事にともない立会を行い、先に設定した調査区の範囲外においてもいくらかの遺物を採集した。

## II. 位置と環境

吹田市の地形はその北と南とで大きく分かれ、北半には千里丘陵が占め、南半には主に淀川や神崎川などの堆積作用によって形成された沖積平野が広がる。高城B遺跡は標高5m前後の平野部に位置するが、当遺跡付近一帯においてはやや縮まった粘土層が地山層として認められ、一般に河川下流の堆積物としてみられることの多い軟弱な土砂の堆積とは異なった様相を示している。この地山層の形成過程・時期については現在のところ明らかではないが、軟弱な地盤の多い平野部にあっては、地盤的にしっかりしていることもあってか、同様の粘土層をベース層とする遺跡が高城B遺跡周辺で多く認められる。

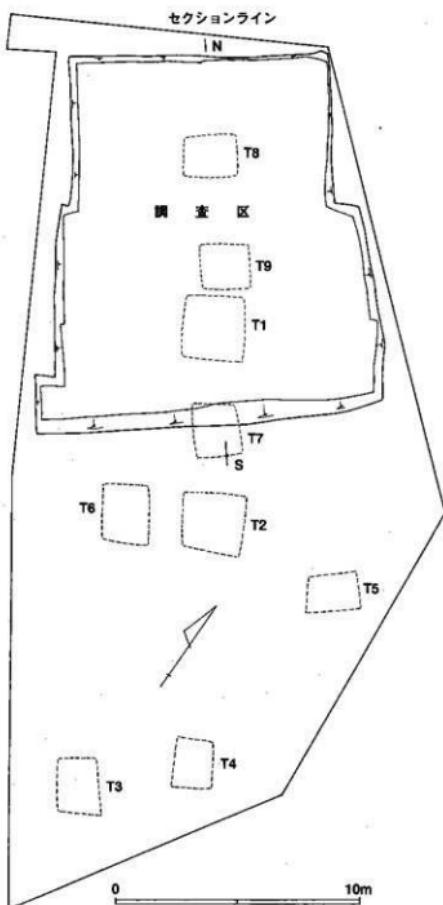


第1図 高城 B 遺跡 第2次発掘調査地周辺図 (1 : 5000)

高城遺跡は、高城B遺跡のすぐ東側に位置する。これまでの調査では平安時代・中世を中心とする遺構・遺物が確認されているが、平成12年に実施した第4次調査では、古墳時代の須恵器を中心とした遺物とともに、遺構が検出されている。また、高城B遺跡北方に位置する昭和町遺跡B地点では、初期須恵器を主体とする遺構・遺物が確認されている。さらに、高城B遺跡のすぐ北東側にある昭和町遺跡においては、地山層としては粘土層でなく砂礫層が認められているが、初期須恵器を含む土師器を主体とした古墳時代の遺物が検出されている。

この他、高畠遺跡では古墳時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されており、さらに東方の目黒遺跡では中世の耕作地跡や、弥生・古墳時代の遺構・遺物が検出されている。

また、高城B遺跡の南西には高浜遺跡・都呂須遺跡などがあるが、この一帯では、高城B遺跡付近で認められる粘土層ではなく、吹田砂堆とよばれる砂層が厚く堆積し、これが遺跡のベース層として認められる。そして、この吹田砂堆上では、平野部にあっては微高地として古くから人々の活動があったようで、高浜遺跡では、縄文時代中期の土器片が検出されている。



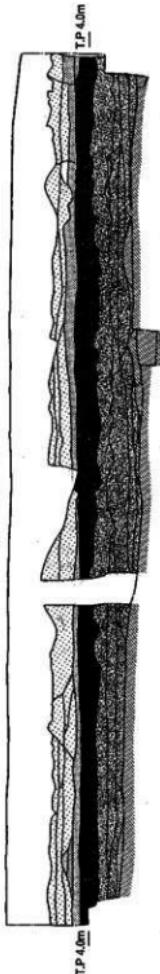
第2図 調査区平面図

### III. 調査の成果

#### (1) 基本土層序

調査区の土層序は、現代盛土・攪乱層（I層）以下、灰色系の土層（II層）、灰褐色系の土層（III層）が堆積し、その下に古墳時代の遺物包含層である黒褐色粘土層（IV層）、地山層で

調査区南壁



- 調査区南北セクションベルト
- |         |         |         |
|---------|---------|---------|
| TP 4.0m | TP 4.2m | TP 4.4m |
| 試験坑(T9) | 試験坑(T1) |         |
| N       |         |         |
| 0       | 4m      |         |
- I層 現代粘土・堆疊層
  - II層 黄褐色系土層
  - III層 灰褐色系土層
  - IV層 黑褐色粘土層（古墳時代遺物包含層）
  - V層 黑灰色粘土層（落ち込み堆積土）
  - VI層 黄灰色・青灰色粘土～砂質土層（地山層）
- a. 黒灰色粘土（鉛分濃じる）層  
b. 黄褐色粘土（より暗、軟質）層
- 土塊土

第3図 上層断面図

あり、古墳時代の遺構ベース層となる黄灰色・青灰色粘土～砂質土層（VI層）の堆積が認められた。また、調査区南側においては、IV層とVI層の間に落ち込み地形の堆積土である黒灰色粘土を主体とした土層（V層）が認められた。

## （2）遺構

調査区の南端部で落ち込み地形が認められ、その北側においてピットや溝、土坑等が検出された。ここで特徴的な遺構についてみておく。

### 【落ち込み】

北から南側へと落ち込んでいく自然地形であると考えられる。その堆積土をみると、黒灰色粘土を主体にしつつ細砂層が混じるというもので、おそらく湿地の環境の中で堆積したものと考えられる。その深さは検出部分で約70cmを測ったが、試掘調査時に今回の調査区外に設定したトレーンチ内の所見では、T 2・T 7で約85cm、T 3・T 4で約40cmの厚さで、落ち込みの堆積土が確認でき、落ち込みは調査地の南側で地形的にやや上がっていくようである。

また、落ち込み内からは多くの遺物が検出されたが、その大部分が上層部からの出土であり、下層部においてはほとんど遺物は認められず、土質もやや砂質気味になることから、この落ち込みの埋没には、時間的にある程度の期間を要したのではないかと考えられる。

### 【土坑】

落ち込みの北端に重複する形で検出された。平面形は長径約230cm、短径約150cmの楕円形を呈し、深さは約110cmを測った。また、その内部西側部分においては、長さ約115cm、幅約25cm、厚さ（中央部）約8cmの2枚の板材が側壁に差し込まれるような形で検出された。これは、土坑のベース層が東側部分で粘土層、西側部分で砂質土層となり、おそらくこの板材は、砂質で崩れやすい土坑西側部分の土留めとして据えられていたのではないかと考えられる。そして、土坑の形状や深さ、土留めとみられる板材の存在などからして、これは井戸として利用されていたものと考えられる。

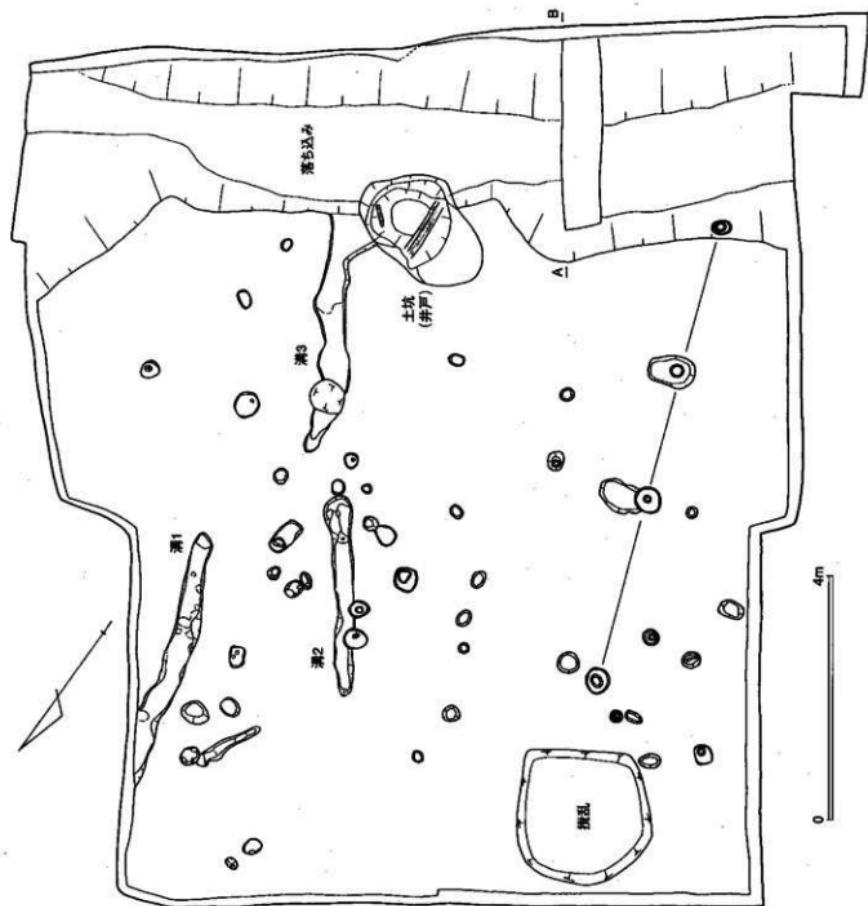
なお、これらの板材にはぼぞ穴などの加工が施されており、もとは建築部材であったものが転用されたものと考えられる。

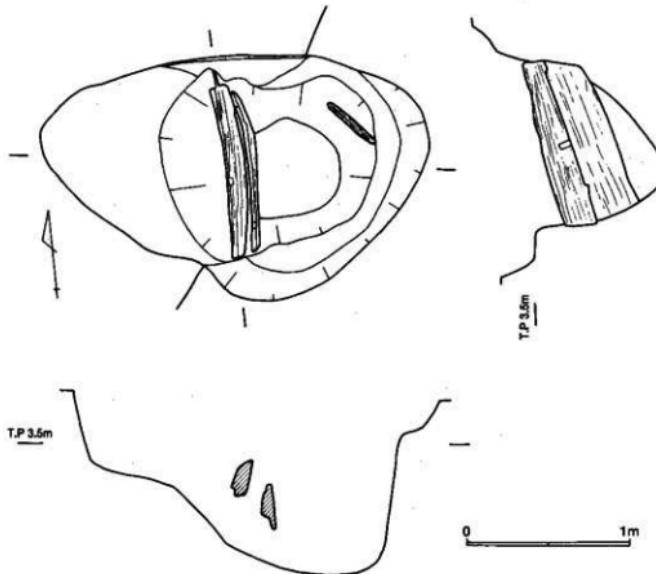
また、この土坑については、試掘調査でのT 1が、ちょうど土坑の中央部をとらえる形となり、拡大調査時には、土坑中央部についての土層観察を行ひ得なかった。

### 【溝】

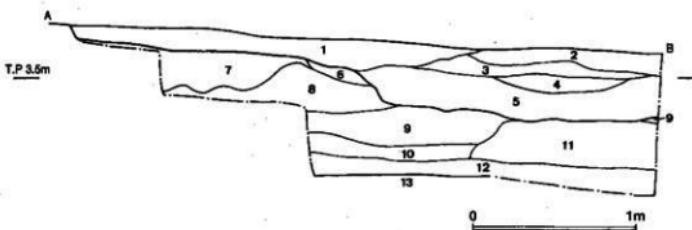
溝1は、幅約30～40cm、深さ2～10cmを測り、N28°Wの方位を示し、溝2は、幅約25～45cm、深さ3cm程度を測り、N37°Wの方位をもってのびていた。溝3は、幅約30～50cm、深さ2～5cmを測り、N27～30°Wの方位を示すが、その南端部で幅をやや広げ、落ち込みに達している。一見すると溝3が落ち込みに流れ込んでいるようにもみえるが、実際のところ、この溝と落ち込みとが一体のものとして機能していたかどうかについては調査において明らかにできなかった。

第4図 造林平面図





第5図 土坑実測図



(土層名)

1. 黒灰色粘土(鉄分混じる)層
2. 淡黒灰色粘土層
3. 黒灰色細砂(やや淡、ややシルト質、暗黄灰色砂混じる)層
4. 淡黒灰色細砂(淡黒灰色砂混じる)層
5. 淡黒灰色粘質土(少量の黒灰色粘土が夾状に混じる)層
6. 淡灰色シルト質粘土(鉄分多く混じる)層
7. 淡灰色シルト質粘土(鉄分多く混じる)層
8. 淡灰色粘質土(少量の黒灰色粘土と斑状に少量の黒灰色粘土が混じる)層
9. 淡灰色砂質土(やや黒色がかる、やや粘質、ごく少量の黒灰色粘土が混じる)層
10. 淡黑色細砂(やや粗、1~2cmの礫混じる)層
11. 淡黒灰色砂(やや褐色がかる、やや粗)層
12. 單色灰色砂礫(2~3cmの礫)層
13. 青灰色粘土層

第6図 落ち込み土層図(断ち割り部分)

## [ピット]

ピットについては多数検出され、その中には柱穴として認められるものもあった。しかし、今回の調査では、建物跡として復元できるものは確認できなかった。ただし、調査区西側においては、ピット間の距離は一定ではないが、柱穴とみられるピットが、N 20° W の方位をもつて並ぶことが確認され、このピット列の西側に建物跡等が展開している可能性がある。

## (3) 遺物 (第7・8図)

### [遺物包含層 (IV層) 出土遺物]

1は弥生土器の底部有孔土器で、復元底径4.6cmを測る。円を描くように板ナデ調整を施す。畿内第V様式後半のものである。

2～7は土師器である。2は高杯の杯部で、復元口径12.1cmを測る。内面はハケ調整、外面はハケ調整の後にナデ消している。庄内式期のものと思われる。

3は手捏ねミニチュア土器である。口径4.6cm、器高2.9cmを測り、内面はらせん状のナデ上げ調整による。

5は破片のため孔は認められないが、形状から蛸壺と考えられる。復元口径5.6cmを測り、やや尖り気味の丸底を呈し、内面は底部から上方へのナデを施す。

6は二重口縁壺の口縁部で口径19.4cmを測る。山陰系のものか。7は壺の口縁部で、復元口径23.2cmを測る。口縁部が上方に広がり、外傾する端部に擬凹線が巡る。

8～18は須恵器である。8～10は蓋杯である。8は復元口径13.8cmを測る。稜は上下の凹線によるつまみ出しにより、浅く鈍い。9は復元口径14.4cmを測る。口縁部は内湾気味で、端部は内傾する明瞭な段をもつ。稜は形骸化して浅い段状となる。

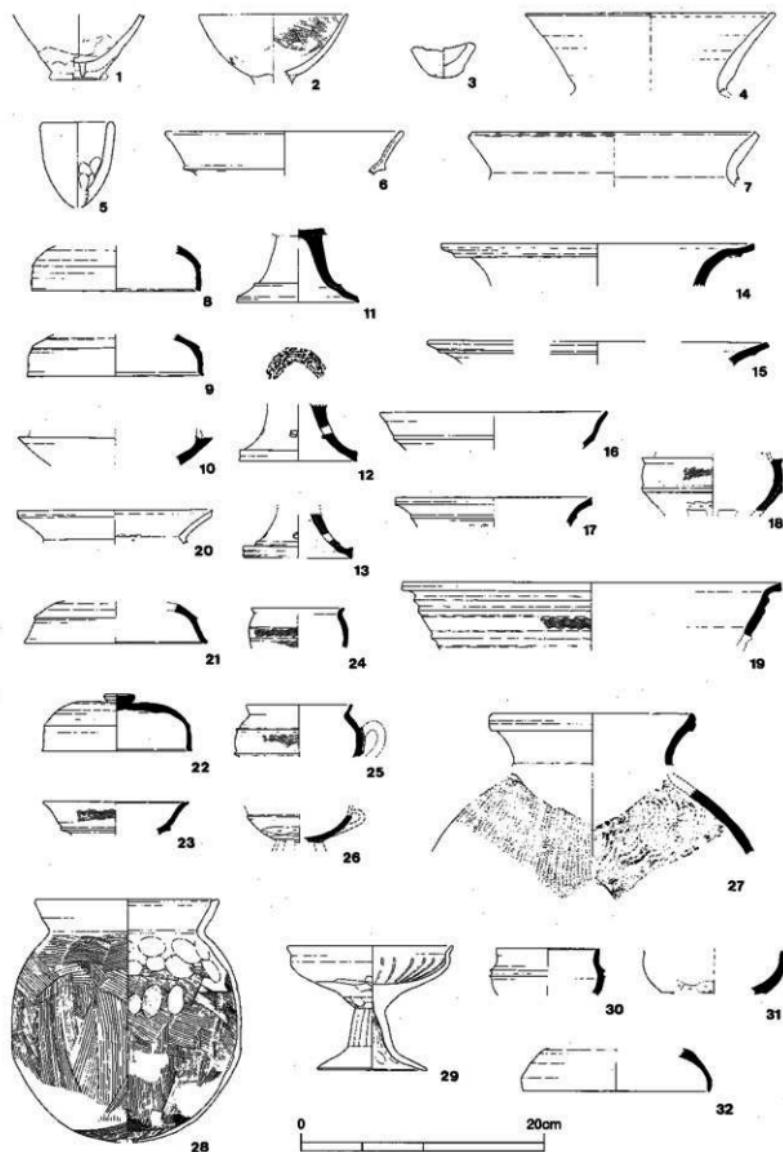
11～13は高杯の脚部である。11は復元裾径9.9cm、脚高5.5cmを測り、脚裾部に断面三角形の突帯を巡らせる。12は復元裾径9.7cmを測る。推定4方向に孔を穿つ。杯部と脚部の接合面には、古式な手法とされる同心円と放射状の刻み目を入れる。13は復元裾径8.8cmを測る。脚裾部に断面半円形の突帯が巡り、推定4方向に円形の孔を穿つ。

14・15は壺の口縁部である。14は復元口径25.5cmを測る。外反してさらに上外方へ屈曲し、端部に面をもつ。口縁端部直下に断面三角形の突帯を1条巡らす。15は口径が細片のため反転復元は困難であった。端部がコの字形の断面を呈し、直下に低い断面三角形の突帯を巡らす。

16は龜または壺の口縁部で、復元口径18.6cmを測る。二重口縁状で、端部は丸くおさめる。

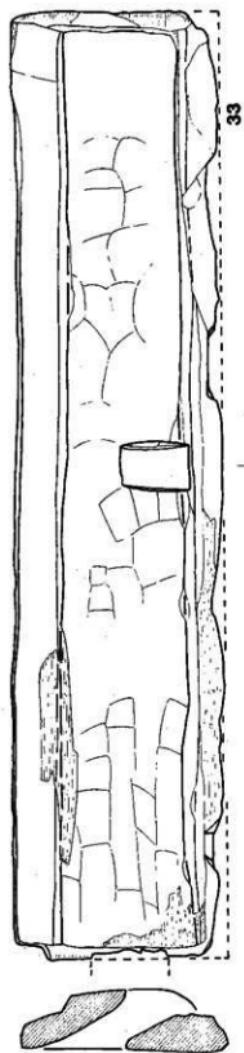
17は壺の口縁部で、復元口径16cmを測る。端部は四面状、口頭部には断面三角形の突帯に画された紋様帶に、波状紋の一部が残る。

18は椀で復元胴径11.6cmを測る。受け口を有し、体部に1条の突帯と7条1組の波状紋を施すが、波形は整わない。底部は横方向の手持ちヘラケズリによる。体部下方に方形の透かしを有する特異な形状のものと思われる。焼成はあまく土師質に近い。大阪府高石市水源地遺跡出土の椀に、類似の形態がみられる。



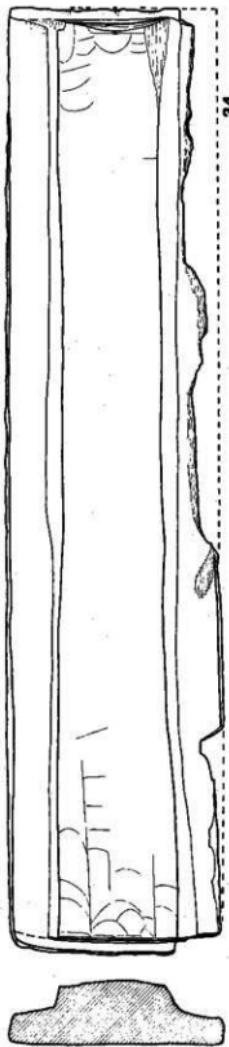
第7図 遺物実測図1

第6图 遗物実測図2



33

40cm  
0



34



19は高杯形器台の杯部で、復元口径30.9cmを測る。凹線状にひねり出した丸く鈍い2条1組の突帶による紋様帶に、9条1組の波状紋を施し、波形は整う。

【落ち込み（V層）出土遺物】

20は土師器甕で、復元口径16cmを測る。口縁部は短く外反し、端部が上方に広がる。体部内面は頸部直下までヘラケズリを施す。米田編年の庄内式期Ⅲに相当する<sup>1)</sup>。

21~27は須恵器である。21は杯蓋で復元口径15cmを測る。鋭い段状の稜を有し、口縁部はハの字形に外反して、端部は浅い段状を呈する。22は高杯蓋で口径12.3cm、器高4.7cmを測る。端部はゆるい段状、稜は短くて丸みをおび、つまみは回転ヘラケズリ、天井部は回転ヘラケズリの後に回転ナデを施す丁寧な調整による。

23は甕の口縁部で、復元口径10.9cmを測り、端部は浅い段状をなす。口頸部に9条1組の波状紋を施し、二重口縁の稜の下部に浅い沈線を巡らす。

24・25は椀で、24は復元口径7.6cm、胴径8.1cmを測る。体部に2条の沈線と、6条1組の波状紋を2列に施す。25は復元口径8.6cm、胴径10.5cmを測る。体部に把手の痕跡が残る。球形の体部に2条の突帶と、8条1組の波状紋を施すが、波形は整わない。

26は小型の無蓋高杯の杯部下部で、耳状把手と脚部の痕跡が残り、脚部には推定6方向に方形の透かしを穿つ。外面下部は横方向の手持ちヘラケズリによる。焼成は瓦質に近い。

27は甕で、口縁部と体部は同一個体と思われるが、接合できないため図上復元する。復元口径16.4cmを測る。口縁端部は玉縁状で、1条の浅い凹線を施す。体部外面は平行叩きの後に回転カキ目調整を施し、内面はすり消そうとする意識がみられるものの、当て具痕が顕著に残る。

【土坑出土遺物】

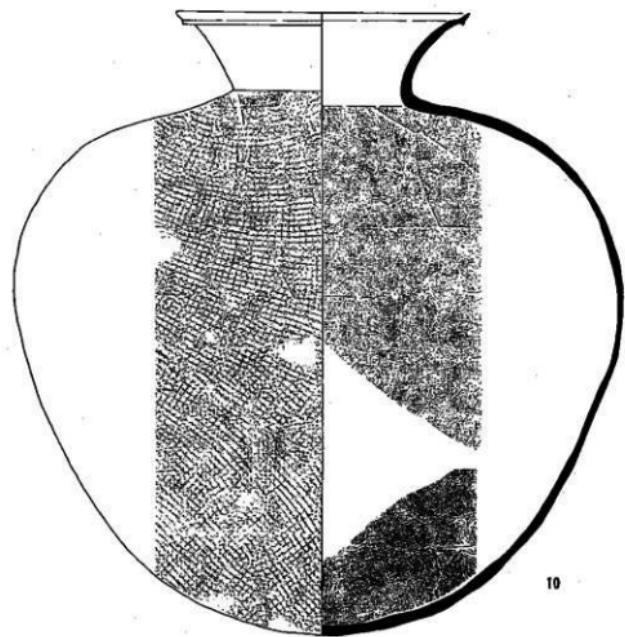
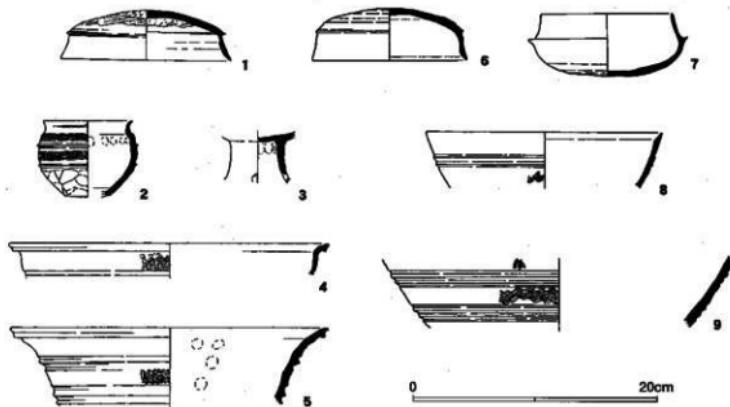
28・29は土師器である。28は布留式甕で、口径14.9cm、胴径18.8cm、器高20.1cmを測る。体部は球形に近く、口縁端部は肥厚し、浅い段状を呈して内傾する面をもつ。内外面ともハケ調整を施す。調整具は幅約3cmを基本とし、底部内面については幅1cmのものを使用している。原田編年の布留式新相（布留IV）に相当する<sup>2)</sup>。

29は高杯で、口径13.5cm、器高10.2cm、胴径8.8cmを測る。口縁部はゆるやかなS字状に屈曲し、脚部から杯部外面にかけてはヘラナデ、杯部内面は放射状にミガキを施す。

30~32は須恵器である。30は椀で、口径8.4cm、胴径（突帶部）9.4cmを測る。口縁端部は面取りして、やや内傾する。体部に2条1組の鋭い突帶を巡らす。焼成は瓦質に近く、外面にはクリーム色の自然釉薬がかかる。

31は鉢の体部と思われる。復元底径8.6cmを測る。底部は横方向の手持ちヘラケズリを施し、底面の調整は粗雑で未調整に近い。焼成は軟質で、土師質に近い。

33・34は土坑内の土留めとして使用されていた板材である。ともに断面は凸形で、建築部材の転用と思われる。表面には加工痕が残り、側面に切り込みが認められる。33は長さ115.2cm、幅26.1cm、厚さは最大で7.7cmを測り、中央に8×5.8cmの孔を斜めに穿つ。検出時点では、小口の一端に厚さ1cm程度の薄い板状の突出部がついているのが確認された。34は長さ115.8cm、



1. 昭和町遺跡出土 2~5. 昭和町遺跡B地点第1次調査出土 6~10. 昭和町遺跡B地点第2次調査出土  
※平成9年度および平成10年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報より転載。

第9図 昭和町遺跡・昭和町遺跡B地点出土須恵器実測図

幅26.4cm、厚さは最大で8.1cmを測る。

以上、出土遺物は古墳時代全般にわたるもので、土師器を主体としつつ、比較的多くの須恵器が検出された。圓化できたものについては須恵器が多く、特に初期須恵器が多かった。

初期須恵器は陶邑窯編年によると、無蓋高杯（26）がTG232型式<sup>3)</sup>、甕（14・15）がTK73型式、杯蓋（21）・高杯（11～13）・椀（18・24・25・30）・鉢（31）がTK216型式、甌（16・23）・壺（17）がON46～TK208型式、高杯形器台（19）がTK208型式におおむね位置づけられるものであった。この他の須恵器では、蓋杯（8）・高杯蓋（22）がTK23型式、杯蓋（9）・甕（27）がTK10型式、杯蓋（32）・杯身（10）がMT85～TK43型式<sup>4)</sup>にそれぞれ位置づけられる。

#### IV.まとめ

今回の調査では、古墳時代を中心とする遺物とともに遺構を検出した。ここでは建物跡を確認するには至らなかったが、柱穴を含むピットが落ち込みの北側において多数検出されたことから、おそらくは、湿地の様相をもった落ち込み北側の地盤的に安定した箇所に人々の居住域が展開していたものと推測される。そして、出土遺物についてみると、土師器を主体としつつ、比較的多くの須恵器が検出された。これら須恵器は5世紀前半から6世紀後半に至るものであり、遺物の出土状況からすると、ここで検出された遺構については、おおむね6世紀後半にその下限をおくものではないかと考えられる。しかし、落ち込みと土坑との重複関係にみられるように、遺構の中には切り合い関係をもつものも認められることから、それらに若干の時期幅はあるものと考えられる。

ところで、今回の調査においては初期須恵器が比較的多く検出された。先述したように、当遺跡周辺には、残存良好な初期須恵器の出土をみた昭和町遺跡・昭和町遺跡B地点がある（第9図）。そして、吹田市の北半を占める千里丘陵上においては、隣接の豊中市域も含めて、古墳時代に多くの須恵器窯が操業され、これまでに吹田市においては56か所で窯跡が確認されている。そして、初期須恵器の窯跡としては吹田32号窯跡、54号窯跡などが知られている。果たして、今回出土した初期須恵器をはじめとする須恵器が、千里丘陵上の窯で焼かれたものかどうかということの検討までには至っていないが、今回検出の6世紀代の須恵器の中には、かなり焼け歪んでいるものも比較的多くあり、須恵器窯が展開した千里丘陵下の平野部において、こうした資料が得られたことは、今後、須恵器生産のあり方、例えば、須恵器の工房や工人居住地の所在などを考えていく上で興味深いものといえる。

（注）1) 米田敏幸「河内における庄内式土器の編年」「庄内式土器研究」VII、1994年、庄内式土器研究会

2) 原田昌則「久宝寺遺跡第1次調査（KH84-1）」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」、1993年、(財)八尾市文化財調査研究会

3) 関戸哲紀「TG232号窯の初期須恵器」「陶邑・大庭寺遺跡」VII、1995年、(財)大阪府埋蔵文化財協会

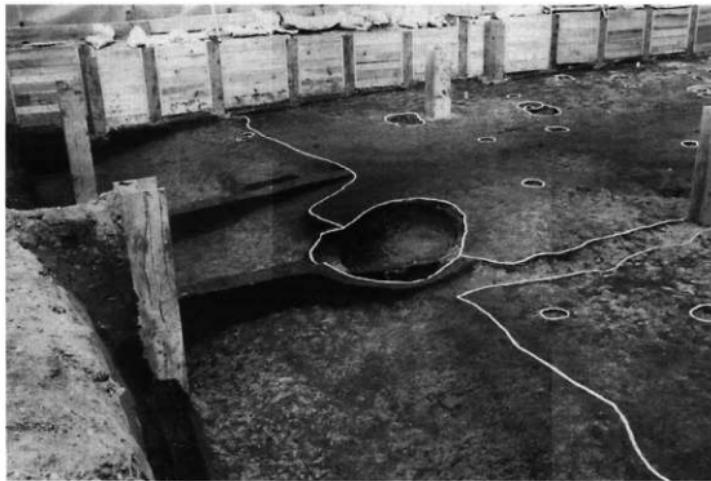
4) 田辺昭三「須恵器大成」、1981年、角川書店



調査風景（南から）



遺構検出状況（南から）



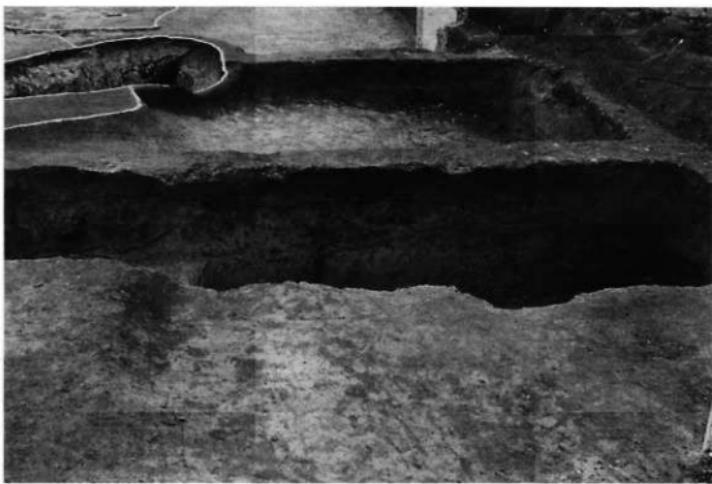
落ち込み・土坑付近（東から）



落ち込み・土坑付近（西から）



落ち込み近景（西から）



落ち込み断ち割り（西から）

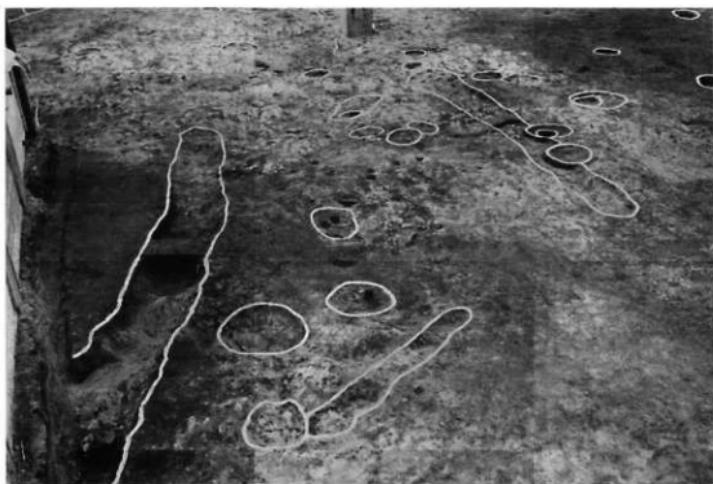


溝3（南から）



溝2付近（北から）

図版 5 溝1・溝2付近・遺構検出状況



溝1・溝2付近（北から）



遺構検出状況（調査区西側、北から）



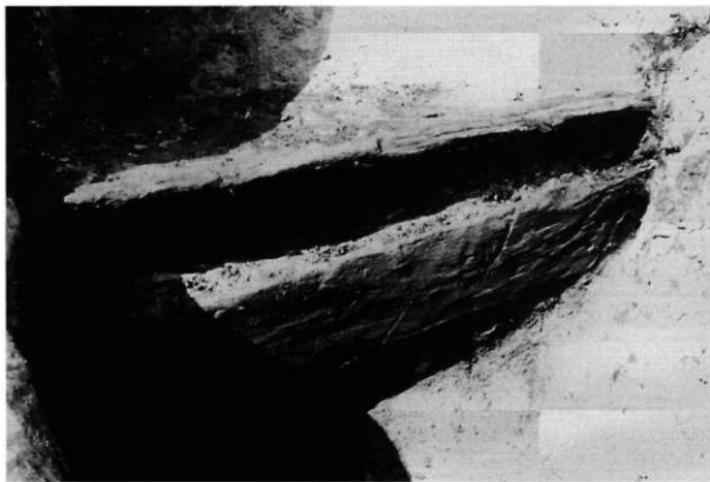
土坑近景（西から）



土坑内板材近景（西から）



土坑近景（東から）



土坑内板材近景（東から）



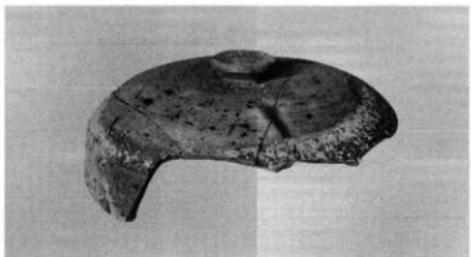
土坑内板材近景（上位板材取り上げ後、西から）



土坑近景（板材取り上げ後、西から）



ミニチュア土器



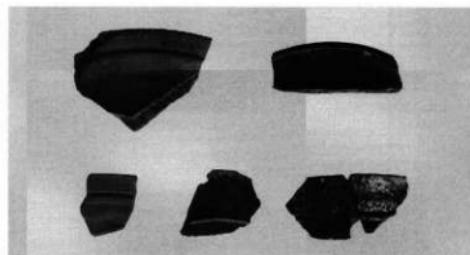
須恵器 高杯蓋



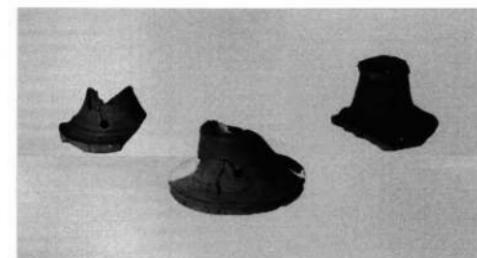
土師器 瓢



土師器 高杯



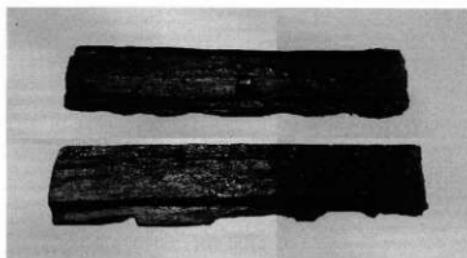
須惠器 盖・壺・底



須惠器 高杯



須惠器 沓



土坑出土板材

**高城B遺跡第2次発掘調査報告書**

平成 13 年 3 月 30 日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号  
発行 吹田市教育委員会